

# 令和6年度 行政視察報告書

産業建設文教常任委員会

# ○産業建設文教常任委員会

## 1 視察期日

令和6年10月28日(月曜) ～ 10月30日(水曜) 3日間

## 2 視察者

### ○委員

委員長	綾香 良浩
副委員長	大村 謙吾
委員	池田 稔巳
委員	井元 宏三
委員	神田 全記
委員	辻 賢治
委員	針尾 直美
委員	松尾 実
委員	松口 茂生

### ○同行職員

農林水産部	部長
教育委員会	次長

### ○随行職員

議会事務局	議事・調査班長
-------	---------

## 3 視察目的

- (1) 不登校特例校の取り組みについて
- (2) 米沢牛の一貫生産について

## 4 視察地

- (1) 宮城県仙台市(学校法人ろりぽっぷ学園ろりぽっぷ小学校)
- (2) 山形県米沢市(米沢市役所および現地視察)

## 5 視察研修概要

別紙のとおり

## 産業建設文教常任委員会 視察研修概要

産業建設文教常任委員会は、宮城県仙台市（学校法人ろりぽっぷ学園ろりぽっぷ小学校）及び山形県米沢市（米沢市役所および現地視察）において視察研修を行ったので、その概要を報告する。

今回の視察目的は、「不登校特例校の取り組みについて」、「米沢牛の一貫生産について」の2件の現地視察である。

### 1 不登校特例校の取り組みについて

#### (1) 学校法人ろりぽっぷ学園ろりぽっぷ小学校の概要

- 児童・保護者・地域・職員、ろりぽっぷ小学校に関わる全ての人にとって「明日また行きたくなる学校」を目指し、子どもも大人も笑顔になれる学校にしていく。
- 子どもたち一人ひとりの良いところをたくさん見つけながら、その子がその子らしく、自信を持って社会に羽ばたくことができるように、「生きる力」の育成を目指していく。
- 自分の得意・不得意を活かしながら、これから先の人生をよりよく生きるための課題解決の力を、ろりぽっぷ小学校の学びで培えるよう、新しい学び方を子どもたち・保護者の方と共に創り上げていく。
- 不登校特例校として開校するが、学校に行けない子どもたちのための学校ではなく、子どもたちの学びの場の選択肢の一つとして、全ての子どもたちが自分に合った学びの場を見つけることができるための一助になればと考え、いつの日か不登校という言葉がなくなることを願いながら、新しい学びの場として開校する。

#### (2) 新たな教育課程

ろりぽっぷ学園の「大人も子どもも育ちあう」「子どもの心に寄り添う保育」の考え方や、オランダで取り組まれている「イエナプラン」のコンセプトを融合させた新たな教育課程「ろりぽっぷプラン」を行っている。学習内容を「自己選択・自己決定・自己対応」できるように配慮することで、各自の興味・関心のある学習内容から、自分の得意とする学び方で学ぶ場を設定している。その学びの場は、学年の枠を超えた異年齢グループなどにも活用。また、イエナプラン教育のブロックアワーとワールドオリエンテーションの学び方を取り入れ、子どもたちの問いからスタートする探求学習と国語、算数、理科、社会などの教科学習が相互に関わり合いながら、子どもがなぜ学ばなければならないのかを感じながら学習できる環境構成を行っている。

### (3) ろりぽっぷプランの特徴

#### ①『人間・キャリア科』の新設

発達障害やいじめ・不登校児童・生徒のコミュニケーション能力の向上を図ることを目的とした心理教育やカウンセリングスキルを活用。「人間・キャリア科」では、人間関係づくりを学ぶ。

また、保護者に対してのストレスマネジメント・カウンセリングの機会を設け、カウンセリングのスキルを活用したプログラムを用意して、保護者も交えての授業も計画し、不登校児童に悩む保護者の支援も行っていく。

#### ②「個別学習」の設定

一人ひとりの状況に応じた指導体制の充実を図るために「個別学習」の時間を設定し、一人ひとりのペースに合わせた学習の時間を確保する。個人の進度に合わせた学びを保証するために、児童・生徒が在籍する学年の单元ではなく、上学年の单元や下学年の習得ができなかった单元を、学んだりすることができるように、学年の枠を超えた異年齢グループでの学びも行っていく。

#### ③さまざまな人（乳幼児・児童・生徒、地域人材）との交流活動・さまざまなこと（動物・畑作・地域）での体験

コミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）を活用し、さまざまな世代の人々との触れ合いを通して、人間としての良さの体験を実感する場面・機会を多く設け、動植物とのふれあい体験や、校内や地域の素材を生かした体験活動を取り入れる。

## 2 米沢牛の一貫生産について

### (1) 米沢市の概要

米沢市は山形県の最南端に位置し、山形県の母なる川「最上川」の源である吾妻連峰の裾野に広がる米沢盆地にあり、北は高畠町と川西町に、西は飯豊町に東と南は福島県に接しており、市域の南側に広がる吾妻連峰は、大部分が磐梯朝日国立公園に指定されている。面積は 548.51K m<sup>2</sup>と広く、南北に 28.2 km、東西は 32.1 kmある。気候は盆地の典型で、夏暑く冬寒いが、四季の移り変わりがはっきりしているため、四季折々の情緒を肌で感じることができる。

明治 22 年、日本で市制が施行された最初の市の一つである。人口は約 85,000 人、そのうち山形大学工学部、山形県立米沢栄養大学、山形県立米沢女子短期大学の 3 つの高等教育機関を有し、3 大学合わせて 3,500 人ほどの学生が米沢市で生活している。また、我が国第一号のインダストリアルパーク「八幡原中核工業団地」を擁し、伝統産業の米沢織物と合わせ県内一の工業出荷額がある産業都市でもあり、上杉氏が治政していた城下町として、数々の史跡と伝統が息づく歴史の街でもある。

## ■ R2 国勢調査結果

		米沢市	平戸市
人口		81,252 人	29,365 人
世帯数		33,013 世帯	12,099 世帯
面積		548.51 km <sup>2</sup>	235.12 km <sup>2</sup>
産業別就業人口割合			
	第1次産業	3.3%	17.9%
	第2次産業	33.3%	19.2%
	第3次産業	59.9%	62.9%

## ■ 議会の概要

	米沢市	平戸市
議員定数（現員数）	24 人（24 人）	18 人（18 人）
常任委員会	総務文教常任委員会 民生常任委員会 産業建設常任委員会	総務厚生委員会 産業建設文教委員会
その他委員会	議会運営委員会 議会広報広聴委員会ほか	議会運営委員会 議会広報特別委員会ほか

## ■ 予算・決算等

		米沢市	平戸市
R6 一般会計当初予算		44,030,000 千円	25,737,000 千円
R5 決算状況			
	財政力指数	0.574	0.24
	経常収支比率	92.6%	91.3%
	実質公債費比率	8.2%	3.3%

## （2）米沢牛の概要

米沢牛は、三大和牛の一つに数えられているブランド牛である。

米沢牛が育てられているのは3市5町からなる山形県置賜地区で、恵まれた環境と飼育農家の努力によって育った米沢牛だが、そのブランドを付けるためには米沢牛銘柄推進協議会【行政（3市5町）、農協、生産者組織、枝肉購買者等】が定める「飼育者の認定及び牛舎の登録制」、「黒毛和種の未經産雌牛」、「と畜場の指定（米沢、東京芝浦等）」「生後月齢33か月以上で肉質等級が3等級以上のもの」などの厳しい条件が設けられており、これらの条件をクリアして初めて米沢牛のブランドを得ることができる。この狭き門は、出荷頭数にも表れており、年間2,000頭ほどしか出荷されていない。

### (3) 米沢牛いとう牧場株式会社の概要（現地視察先）

2021年の共励会ではグランプリを獲得するなど、多くの優秀な米沢牛を輩出している「米沢牛いとう牧場株式会社」。家族3代にわたり米沢牛の生産に尽力し、現在は3つの牧場を所有し約100頭の牛を飼育している。

## 産業建設文教常任委員 視察研修所感

### ■綾香 良浩 委員長

ろりぽっぷ小学校は、閉校した小学校を活用した不登校特例校である。児童個々の状況に応じた学びのペースをどのように確保して学習していくかということが課題であるが、一人ひとりに合わせた授業行程などをつくり、得意分野を伸ばし、登校したくなるような環境整備に努めている。閉校された学校を使用しており、家賃や改修費用を負担しなければならないため、厳しい運営を行っているようであるが、幼児から児童までの就学の機会（不登校の児童を減らす）を提供していきたいという思いには脱帽であった。

本市においても同じような境遇の児童および生徒が安心して登校できるような環境整備に力をいれなければならないと感じた。また、公立学校ではないため保護者の費用負担も課題とされており、保護者と学校の運営と行政の関わり方についてどう考えるか、子どもたちに学びの格差が生まれないように、どのようなかたちと支援で学びの機会を守っていくか、児童および生徒本人はもちろんのこと、家庭環境も踏まえた支援など横断的な支援体制の整備もあわせて考えていく必要があると感じた。

次に、米沢牛の行政視察を受けて、繁殖農家主体から肥育も取り入れた一部一貫生産への取り組みにも一定の理解が進んだ。経営の観点からみれば、子牛価格の相場に左右されるので一貫生産のメリットは大きいですが、現在の子牛相場の低迷を考えると、難しい側面もあるかもしれない。しかし、自家産の牛を米沢牛として出荷させていくという基本理念をしっかりと持たれ経営されていることが今日につながっているのだと思った。

平戸市のように繁殖農家が多い経営体の方が牛の性質をよく理解しているということから、一貫生産を行う上での技術的な部分については、肥育から繁殖より、繁殖から肥育の方が比較的容易であるということ。平戸市においても一貫生産を形成する仕組みがあれば、産地を残すという一助になり得る施策になるのではないかと思う。

### ■大村 謙吾 副委員長

仙台駅より西南部に車で30分程移動した。そこは山地に囲まれ森を中心に集落があり100万人都市の近郊に位置しながらも、どこことなく平戸と似た景色の場所で、自然に囲まれた環境の中に学校があった。校舎は廃校した小学校の跡地を再利用し、廃校から10年

経過したとは思えないほどきれいな学校だった。中に入ると授業中の子どもたちの元気の良い声に出迎えられ、校長先生より「ろりぽっぷ小学校」のメソッドやコンセプトなど不登校特例校の取り組みについて説明を受けた。

どこまでも子どもに寄り添う学校としての姿勢は、一人ひとりの児童を尊重し、その子らしく、社会で幸せに活躍し、どんな社会でも切り開いていける。社会現場対応できる教育を推進していることなど、今まさに直面している人財教育の大切な部分も学んだ。

1年が経過すると当たり前のように進級する公立学校とは違い、イエナプランのマルチエイジ学級編成は1～3年生、4～6年生の異年齢学級編成などの取り組みは、当たり前、普通という言葉の概念がいかに関心本位なのかと気づかされた。このようなコンセプトは自分の周りの職場や生活環境に置き換えて見ても教育現場の改善が図れることも多くあると感じた。

次に米沢市を訪れ「米沢牛の一貫生産」について学んだ。令和5年2月の山形県置賜地区全体の米沢牛畜産農家の状況を見ると農家戸数が212戸、飼養頭数10,728頭であり、米沢市だけでは農家戸数が30戸、飼養頭数が2,258頭と本市より少なかった。3年前と比較すると農家戸数は約25%減少しているにもかかわらず飼養頭数は約3%増加しており、規模拡大はしているものの担い手の確保が課題ということであった。

今後、平戸産の牛のブランド化や飼料・資材の価格高騰などを見据え、「資源を活用した畜産経営」「耕種農家と畜産農家の連携」「既存の畜産農家が長く続けることができる環境整備」など持続的な畜産経営の推進を行っていく必要があると考える。

## ■池田 稔巳 委員

ろりぽっぷ小学校の研修では、概要にある目的と理想を読んだ時に、「『明日また行きたくなる学校』その子がその子らしく、自信を持って社会に羽ばたくことができるように、『生きる力』の育成を目指します」とあった。これは正に義務教育の一般的学校の方針と概要であって欲しいと感じた。こんな考え方が一般校で十分にできれば、不登校の子どもたちは少なくなると思う。

しかし、国が指導する義務教育の現場では、多くの子どもたちを合理的に少ない経費でバランスよく教育しなければいけない。まして少ない先生方で統一的な能力の児童に育てなければいけない。そこでは子どもたち、一人ひとりの個性を生かし、悩みや要求を救い上げるのは難しい。そうなるとう集団教育についていけない子どもたちが生まれる。だからこそ、こうした学校が必要になってくるのだろう。説明を受けた校長先生は「不登校特例校として開校していますが、学校に行けない子どもたちの学校ではなく、子どもたちの学びの場の選択肢のひとつとして開校いたします」と言っていた。こうした学校の誕生は時代が求めたものであり、これからも必要とされるだろうと感じた。

次に訪れた米沢市の「米沢牛の一貫生産について」での研修では、歴史が作り上げたブランド牛「米沢牛」の産地としての影響力が、市の畜産部門産出額40億円(肉豚含む)に現れていた。しかしながら、ここでも販売価格の低迷や、飼料原料の価格高騰が経営

を圧迫していた。就農高齢化や人材不足でも同じ悩みを抱えていた。今まで国策で進めてきた和牛ブランド化の事業である。「国策での支援無くして日本の農業、畜産業は守れない」と強く思う。

## ■井元 宏三 委員

米沢市の畜産農家視察研修では、近年加速する子牛価格の下落と、それによる畜産農家経営の減少を食い止める施策を考えるため。また、それによる和牛畜産農家の一貫生産を行っていく上でどのように進めていけばいいかという点を学ぶために視察を行った。

訪れた米沢市畜産農家の経営状況について、農業産出額は全体で71億円、そのうち畜産部門は40億円と5割以上を占めている地域である。やはり日本三大ブランドの一つ、米沢牛が主流であり高品質な畜産物を生産する能力の高い経営体が多い地域である。しかし、この地域においても農家の高齢化による戸数の減少や、飼料価格や資材等の高騰が課題となっている。

今回視察の重要な点としては一貫生産に対し、市がどのように関わっていけるのかということを知りに行ったが、米沢市においては肥育農家から繁殖農家への一貫生産の転換であり、平戸市は繁殖農家から肥育農家への転換という点で少し違ったものとなっていた。米沢市では、生育された肉が全国でも高い価格となっており、繁殖から行うとなると自給飼料の確保、作業量増加のための人員確保が必要となり、また、規模拡大による土地の確保や施設増築への費用増加が伴うが、市の援助などはなく、農家が繁殖から行うことが和牛のブランド地としてのメリットがあるのかどうかを見出すことが難しいと考えられている。そのため、現在、一貫生産を行っている農家は3件のみに留まっている。

今回現地視察に行った米沢牛の生産者からは、繁殖から行うことで、「飼育牛の仕入れコストの低減」「買付けた牛と違いストレス期間が無い」「成牛までの飼料コントロールがスムーズ」といった効果があり、現在の米沢牛の肉質より良いものが期待できると伺った。本市においても一貫生産を行う事業者に対し、補助の活用や低利融資等を使い、まずは生産を行い、一貫生産での平戸産の牛のブランド確立が重要ではないかと感じた。

## ■神田 全記 委員

米沢牛の定義は、飼育者の認定及び牛舎の登録制、黒毛和種の未經産牛、と畜場の指定、生後月齢33か月以上で肉質等級3等級以上と米沢牛銘柄推進協議会(3市5町)、JA、生産者組織、技肉購買者で組織されそれぞれが意識を高く持ち、これまでの米沢牛を確立されている。行政の支援も市の基金で雌牛無利子の貸付、JAの貸付の1%以内の額の補助、公営育成牧場、国県の補助要件に合致しない部分についての補助等参考になった。今後も血統にこだわりの一層の推進と支援に力を入れるとの事であった。

現場視察では、夫婦で分担された一貫経営の先進的な経営現場の学びを得た。牛舎も



こだわりの設計が施され一目見渡すだけで全体の牛の状況が把握できる。どの牛も人間に怯えずのどかであった。一貫による子牛から肥育出荷するまでの成長過程を全て把握できる事で、より一層の肉質、枝重を安定的に目揃え、価格に反映できている。これがこの地が誇る米沢牛であると感じた。

33 か月の長期飼育は管理餌代のコスト増で大変な一面、技術とブランド力で安定経営を確立されている。子牛の市場が厳しく低迷を続けるなか、本市においても今後緊急対策に取り組み、生産基盤と産地として将来を見据えた対策を生産者そしてJAと連携を深め、この大きな災害の難を乗り越えなければならない。

## ■辻 賢治 委員

今回、仙台市にある不登校特例校の「学校法人ろりぽっぷ学園ろりぽっぷ小学校」を視察した。小学校が廃校した跡地を再利用し、公募型プロポーザルを経て運営を開始している。

まず訪れてびっくりしたのは、校舎の素晴らしさであった。児童数の減少によって廃校になったと思うが、木をふんだんに使った見事な施設であった。その後、校長先生から説明を受け、この小学校の基本コンセプトは、「明日また行きたくなる学校」ということで、学校に行けない子どもたちのための学校ではなく、子どもたちの学びの場の選択肢の一つとしてすべての子どもたちが自分に合った学びの場を見つけることができるための一助になればという思いであるということであった。

授業は「イエナプラン教育」を実践していた。「イエナプラン教育」とは、科目別に分けた日課ではなく、4つの基本活動、「対話」「遊び」「仕事」「催し」を学校生活の一部と捉えて日常生活と同じリズムで日々を循環させていくことであり、大人が「子どもたちを育てる」のではなく、子ども一人ひとりが「どう育とうとしているのか」を大切に、個々の特性を見出し、その特性を生かし将来に羽ばたいてほしいという先生たちの思いが伝わってきた。先生たちの献身的な寄り添いのおかげで、子どもたちが明るく、元気で、笑顔であったことにこの学校の存在意義があると強く感じた。

先日発表された統計によると、令和5年度の不登校（30日以上欠席）の児童・生徒数は、全国で34万6,482人、県内でも4,095人と過去最多であった。一方、受け入れとなる不登校特例校は全国でも約30校ほどである。フリースクールもあるが、いずれにしても受け入れのキャパは不足しているのが現状である。今後どのように対処していくかが、国・県・地方自治体の大きな課題である。

## ■針尾 直美 委員

1日目の研修先である「ろりぽっぷ小学校」については、事前に調べていたものの、実際に訪れてみると、廃校だったとは思えない新しい感じの建物だった。自然体で過ごすことを許された子どもたちは、伸び伸びと明るく、笑顔一杯で、不登校という言葉か

ら連想するそれとは違っていたことが印象的だった。施設内も明るく開放的で、子どもたちがどこにいても居心地よく過ごせるような工夫がなされているばかりでなく、保護者がくつろいだり、リモートワークができるスペースもあって、保護者の心にも寄り添った環境づくりとなっていることに驚いた。また、ノックをするなどの一定のルールはあるものの、職員室や校長室へも自由に入室できること、学年の枠を超えて子ども一人ひとりの学習ペースで学習できるよう配慮されていることなど、至る所にイエナプラン教育の考え方が体现されていた。

「大人がどういう子に育てたいかではなく、子ども一人ひとりがどう育とうとしているかを大切にする」「不登校の子どもたちのための学校ではなく、学びの場の選択肢のひとつとしての多様化学校でありたい」という校長先生の言葉に、本来の学びの在り方を感じ、課題はあるが、平戸の子どもたちにもいろんな学びの選択肢を提供したいと思った。

2日目の「米沢牛いとう牧場株式会社」では、「利益より、理念を大切にしたい経営を行っている」という言葉が印象的だった。繁殖と肥育という違いはあれ、理念に基づいた経営姿勢には学ぶことが多かった。

この視察で学んだことを今後の活動に生かしていきたい。

## ■松尾 実 委員

研修前、ろりぼっぷ小学校は、普通の小学校には馴染めない不登校児童に対応する学校だと思っていた。ところが、学校に入ると明るく元気にあいさつをしてくれ、校内で児童同士が楽しそうに会話をしている姿を見て、不登校児童に対するおとなしくて会話のないイメージが瞬く間に一新したと同時に、この学校の教育環境及び教育運営に興味を持った。

「すべての子どもが、自分に合った学校教育をテーマに子どもの心に寄り添うその子の個性や可能性を大事にしている。周りとの比較ではなく、以前の自分との比較を大切にして育む教育が運営方針」とうことで、学力重視の現在の学校にはない自分の得意な科目を伸ばす学習、体験や汗を流す活動など、普通の学校ではなかなかできない理想的な学校だと思った。

本市に同様の学校を作ることは非常に難しいが、積極的に子どもたちに関わる環境づくりは、家庭、学校、地域との連携でいくらかでも可能だと感じた。今の子どもたちは、家庭での手伝いや、友だちと野山を駆けめぐるなど、子ども同士での連携、体験、経験が乏しいので、家庭、学校、地域で協力し取り組むことで、学校の中だけでは学ぶことのできない貴重な学びが習得できる。例えば土日に行く、野外学習、体験学習、地域の方々とのコミュニティづくりなどは、各地区のまちづくり運営協議会やボランティア、元気な高齢者の協力を受ければ可能だと思う。周りの環境が整い、子どもたちがふるさつを知り、誇りを持てる学びの機会を得ることができれば、不登校やいじめ問題の解決に少しでも繋がるのではないか。他所の子も我が子も地域の宝、未来の宝として、ものづくり同様に子どもたちの健全育成、人材育成に地域を巻き込んだ取り組みをすること

で、子どもたちの個性を生かす教育支援は可能であり、今後ますます必要だと思う。

現在、児童数が減少するなかに不登校やいじめ、特別支援を必要とする子どもたちは、減らない現状を学校だけの問題・責任にしてはならない。今後は、家庭、学校、地域とのさらなる連携で素直な子どもたちの健全育成、学力向上と同時に心身共に学ぶ環境の充実、協力体制の必要性を強く感じた。

## ■松口 茂生 委員

1日目に「不登校特例校の取り組みについて」仙台市にある、ろりぼっぷ小学校を訪れた。私は学校運営（経営）について興味があったため質問も行った。その中で、企業からの寄付もあるが現在も赤字運営で会社の本体からの補填がなければ小学校の経営ができないとの事であった。

施設の維持管理及び人件費等の経費を補う為には相当数の（最低80名との事であった）の児童を受け入れなければならず、現状の児童数（30人程度）が続くと、授業料等も私立学校並となり保護者の負担も多く通わせたくてもできない場合も想定され、特例校の持続可能な学校経営には協賛企業や公的支援・援助も必要なのではと強く感じた。また、児童のいきいきとした表情は小学生らしく特に印象的であった。

2日目は米沢市を訪れ、「米沢牛の一貫生産について」市役所で座学を行い、その後一貫生産を行っている「いとう牧場株式会社」を訪問した。畜産関係行政担当者の話を聞いて思ったことは、米沢牛ブランド維持の為に生産者の努力はもちろんだが、市の単独事業による補助や高齢母牛に対しての支援等幅広い行政側の施策は参考としたい。

一貫生産については繁殖から肥育まで行う事で、収益性は向上すると思われるが、十分な自給飼料の確保や何よりも作業量が増大する事による労働力の確保が一番懸念されると感じた。本市においては、今後平戸産の牛の更なるブランド化の確立及び消費拡大のために、生産者と行政や議会が更に緊密に連携を取りながら、平戸産の牛が新三大和牛と言われるようなブランド牛となるよう願う。

以上、報告する。

令和6年12月2日

平戸市議会議長 松本 正治 様

産業建設文教委員長 綾香 良浩